



石見郷土研究懇話会

『郷土石見』113号 の表紙

【書評】『郷土石見』第116号・石見郷土研究懇話会刊  
A5判 一二八ページ 定価一、二〇〇円(税・送料込み)

石見人の知性に輝く総合誌である。本誌創刊は昭和五十年(一九七五)であり、確実に号を重ねてこのほど一六号に達した。内容は論文五、民俗二のほか小説など多彩である。

酒井 董美 ただよ

冒頭論文は森脇晋平氏の「海洋学者・丸川久俊の研究を読む(九)―日本の海洋調査―」である。浜田出身の丸川久俊(一八八二―一九五二)が日本海調査で初めて新造された専用調査船・天鷲丸で、大正八年から三年かけて行った調査、海流、水温と比重(季節変動を含む)、海水中の酸素量と水素イオン濃度、新堆(大和堆)の発見について述べている。次に高橋悟氏の「石見銀山の石造アーチ橋を探る―(2)―羅漢町石造アーチ橋―」で、明治以降の石造アーチ橋建設の流れを押さえつつ、石見銀山羅漢町橋建設を詳説しており、写真も豊富である。続いて岩町功氏の「島村抱月の演出力への考察―トルストイ作『闇の力』上演を通して―」がある。島村抱月(一八七二―一九一八)主宰の藝術座はトルストイの作品「復活」「アンナ・カレーナ」を生ける屍などを上演しているが、藝術座始まって以来最高の出来映えと言われる「闇の力」を取り上げて、抱月がトルストイの作品をどう捉えていたか、当時の評価資料を示しつつ岩町氏の見解を示している。

岩崎健氏の「大内義弘の益田退治が及ぼした影響①―石見の南北朝時代から室町時代にかけての動向を述べて―」次回の期待が高まるものである。論文の最後は、安達肇氏の「私生活を綴った歌日記―人麻呂歌集についての考察(二)―」であり、万葉の歌人柿本人麻呂の旋頭歌を例にあげつつ、漢字表記の和文化についての考察がなされ、興味深い。このほか井戸平左衛門の功績を偲ぶ田城謙二郎氏「芋塚さんの建立」や村上英明氏の「新むかしばなし(二)イルティッシュ号の話(江津市和木町)」。徳原繁一氏の小説「北辰の旗」く松平武聡の憂鬱「なごの意欲作など」目白押しである。

「町から村から」では浜田市久代町・山崎重子氏の「久代の浦恵比須講」も貴重である。

巻末は、第二回「大元・石見神楽調査研究賞」優秀受賞作として柿出浩輔氏の「石見地方とその周辺地域の神楽における「天狗」の登場に関する考察」であるが、作品審査に当たった筆者としても、広島県在住の高校生だった作者の、見事な知見に驚いたことが思い出される。

本誌が石見の文化を着実に支えているのを確認し、読了した筆者である。(元島根大学文学部教授)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【連絡先】〒697-0017 浜田市原井町1023-9 森脇晋平方  
石見郷土研究会事務局 ☎090-3378-9031